

本棚



3 版 放射線管理実務マニュアル

日本アイソトープ協会 編



新たに放射線管理の任に当たる方はもちろん、放射線管理を長年経験した方であっても、いざ立入検査となると記帳が適正になされているか不安になり法令を確認することもあるのではないだろうか。この「3 版 放射線管理実務マニュアル」

は、実務経験豊富な編者の経験が詰まったノウハウ本である上、法令集にまでさかのぼらなくてもよいレベルの法令確認が可能である。特に手続きや各種申請書、記帳、記録、予防規程など例がふんだんに紹介されており、ほぼ全ての事業所において利用可能な書式が整っている。放射線管理室に保管しておく、いつでも参照可能としておきたい 1 冊である。

第 1 章では本マニュアルの構成や使い方が概説されている。特にエクセルを利用した入力例は線源を保有している施設に有用であろう。また、放射性汚染物や放射化物の管理についても記載されている。

第 2 章では使用前、使用の開始前、使用中、及び使用の廃止に際し必要な諸手続について解説されている。どの施設も、使用中の手続き以外は頻度が低いものであるがゆえに慣れていない手続きであろう。必要となった場合には大いに参考になるものである。

第 3 章では記帳・記録について記載されている。本書で最も参照頻度の高い章であろう。これら記帳・記録は、使用中は日常的になされているものがあるが、一度やり方を決めるとそれが定例化するの

で、最初にきちんと法令を満たすフォーマットを定める必要がある。特に放射線管理を新たに行う者においては、本書の記帳の例を参照することで法令を遵守する一方で効率の良い作業が実現できるものと思われる。

第 4 章では使用に関わる点検について記載されている。施設点検は自主点検であり、年 2 回を標準として各事業所が実状に応じて頻度を定めることになっているが、ここで紹介されている点検表は、放射線管理状況報告書として利用することを視野に入れており、実践的である。

第 5 章は予防規程の作成方法である。特に使用形態別の一覧表は力作であり、国内のほとんどの事業所はどれかに当てはまるので、例文をそのまま活用できるであろう。

第 6 章は使用許可申請書、第 7 章はその他の申請書の例である。それぞれ、頻度は高くない申請であるがゆえに、こういったマニュアルは大いに活用すべきであろう。

その後、付表として使用者等の義務事項や障害防止法・電離則・人事院規則・医療法の関連などが掲載されている。また、参考資料には各種申請書の例や参考となる法令等が掲載されている。全 450 ページを超える力作である。

このマニュアルを重視して放射線管理をしていれば、管理業務において問題はないだろう、という安心感のある 1 冊である。できれば、CD-ROM 等を付録として電子ファイルで本稿記載の各フォーマットを入手したい、と思ったのは筆者だけではないはずである。一方で、国内の放射線管理状況を背景として、立入検査や施設検査・定期検査、定期確認については検査・確認の重点項目が変化したり担当者によって指摘のニュアンスがやや違ったりということが起こり得るので、この点はマニュアルのみに頼らない、主任者の横のつながりによる口コミが重要なかもしれない。そのあたりまでマニュアルに盛り込むのは難しいだろう。マニュアルの利用と主任者間の連絡の双方の重要性を感じた 1 冊であった。

(田野井慶太郎 東京大学大学院農学生命科学研究科・放射性同位元素施設)

(ISBN978-4-89073-251-7, A 4 判 479 頁, 定価本体 7,300 円, 丸善出版, ☎03-3512-3256, 2015 年)